

がん免疫薬「やめどき」研究

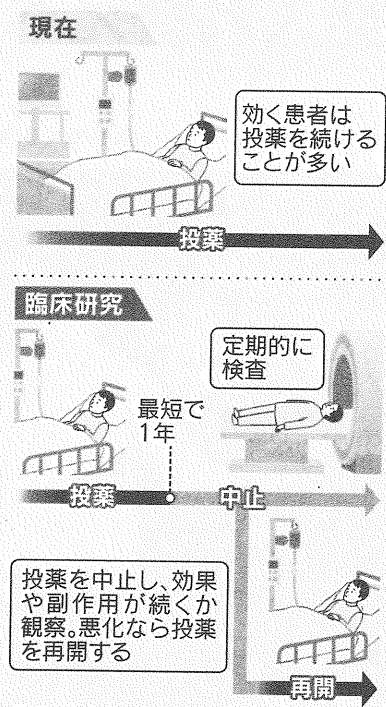
オプジーボなど 過剰投与省く狙い

国立がん研究センターなど全国の約40病院は、肺がん患者にがん免疫薬「オプジーボ」を使うのをやめるタイミングを探る研究に乗り出す。投薬の効果や副作用が続く期間を調べる日本初の臨床研究を2019年3月にも開始。オプジーボは一部の患者に大きな効果をもたらすが、高額な費用が問題となっている。集まったデータを基に過剰な投薬を省けば医療費を抑え、無駄な副作用も避けられるとみている。

高額な医療費抑える

オプジーボは体に備わっている免疫の仕組みを利用した画期的な治療薬で、末期がん患者の一部にも効果が出る。今年ノーベル生理学・医学賞を受賞した。最初皮膚がん向けに発売し、その後、患者が増とともに医療財政への負担が増えている。多くの肺がんや腎臓がんに適用を拡大。17年度は、小野薬品のオプジーボの売上高とロイヤルティ収入を合わせると約1300億円にのぼった。一方、薬代が年間1千万円を超え、患者の負担増とともに医療財政への

無駄な投薬を省き、医療費を抑制



影響が懸念される。投薬期間の明確な基準がなく、効果や患者の要望に応じて医師が判断している。薬が効いていると判断すると、そのまま投薬を続けることが多い。また健康な臓器が傷む副作用が起きることもある。国立がんセンターや静岡県立静岡がんセンターなどの約40病院が、がん免疫薬の投与を最短1年でやめる臨床研究を始める計画だ。オプジーボのほか、米メルクの「キイトルーダ」、スイスのロシュの「テセントリク」が対象。投薬で肺がんの悪化を防いでいる患者約200人を調べる。投薬を中止する患者と継続する2つのグループに分け、治療効果や副作用がどのくらい続くのかを調べる。最長で3年間、

観察を続ける。中止後にがんが悪化した患者は、投薬を再開する。中止後

も効果が長く続くことが分れば、他の薬で副作用に対処できなくなる。今後、肺がん以外でも同様の研究が始まる可能性がある。